

100年 先を読む

江戸という ソフトパワーを 日本再生の活力にする

▶ 古典文化で再生したルネサンス

ルネサンスという言葉は再度の生誕、すなわち再生が原義であるが、日本では文芸復興と翻訳されることもある。

不当にも蛮族と名指しされた北方の民族が南下して社会が混乱した中世ヨーロッパは、現在では否定されているが暗黒時代と理解され、そこから脱却して古代ギリシャや古代ローマの古典世界へ回帰しようという活動がルネサンスである。

その結果、古代の芸術様式や科学技術を見直す活動が登場し、ヨーロッパは再生した。

現代の日本は暗黒というほどではないにしても、150年近く増加してきた人口は減少に反転し、1980年代には毎年5.8%以上で成長していた経済も、バブル経済崩壊以後の20年間は平均すれば毎年0.1%以下の増加でしかなく、完全に停滞している。

さらに日本経済を牽引してきた工業も、公的資金の補助なしでは成立しない企業や、外国企業に身売りせざるをえない企業が続出している。ここからの再生が必要である。

▶ ソフトパワー時代の出発

ルネサンスという転換が古代ギリシャや古代ローマを目標にしたように、日本が目標とすべき時代を模索すると江戸時代が浮上してくる。

これには根拠がある。1980年代にアメリカが日本に急迫され、自動車生産でも半導体生産でも逆

転された時期に、アメリカは国力の源泉を模索した。未来学者アルビン・トフラー、政治学者ズビグニュー・ブレジンスキーなど何人かの識者が提言しているが、それらに共通する見解がある。

古代から国力の中心は軍事力（ハードパワー）であったが、地球規模の航路が開拓された16世紀からは、先進諸国が貿易によって国富を蓄積する重商主義を国家政策とした結果、経済力（エコノミックパワー）の時代が到来した。



その貿易対象は金属、食料、繊維など、すべて物質であった。しかし20世紀後半になり、コンピュータやインターネットが登場したことにより情報が国力の中心に位置するようになった。

この情報の役割を文化力（ソフトパワー）と名付けたのが政治学者ジョセフ・ナイであり、その本質は魅力であると喝破した。それは文化、制度などにより、世界の人々が共感する国家になるように仕向けることである。

ブレジンスキーはアメリカが大国になったのは「粗野ではあるが世界の若者を魅惑する文化」の功績だと説明しているが、その文化を目指して優秀な研究者、芸術家、実業家がアメリカに到来し大国になったというわけである。

▶ 江戸というソフトパワー

今年が明治維新150年の節目であるが、この150年間を上記の理論により整理すると、明治政府の富国強兵政策により、日本はハードパワーで世界有数の大国になることに成功したが、敗戦により

地位を喪失した。

戦後は先人の努力によりエコノミックパワーで一旦は世界二位に到達するまでに発展したが、残念ながら、バブル経済の崩壊とともに長期の低迷の渦中にある。それはソフトパワーへの転換に出遅れた結果である。

中世ヨーロッパが千年以前の古典世界を参考に再生したように、日本にも江戸時代をソフトパワーの手本にする戦略が必要である。

幕末から明治に到来した西欧の人々の多数が日本を絶賛している。それは浮世絵や工芸品など日本独自の文化だけではない。通訳と二人だけで江戸から蝦夷へ旅行した女性イザベラ・バードは、道中での村人の対応に感動し、工学教育のため来日したヘンリー・ダイヤーは、学生の能力と礼儀に驚嘆している。

この戦略は懐古趣味ではない。明治時代以来の文明開化の潮流に一扫されず、日本社会の基底に存続してきた精神、文化、制度こそ西洋古典世界に匹敵するソフトパワーである。

仮想通貨、人工知能、電子取引などが優勢な社会であるが、これらの道具をソフトパワーとして駆使できなければ、空疎な社会にしかなりえない。『モラルBIZプレミア』が『道経塾』の後継として、ソフトパワー時代の先達になることを期待したい。



つきおよしお
月尾嘉男
Tsukio Yoshio

昭和17年(1942)生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学工学部教授、東京大学工学部教授、総務省総務審議官等を経て、平成15年、東京大学名誉教授。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーをしながら私塾を主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。著書に『縮小文明の展望』(東京大学出版会)、『先住民の叢智』(遊行社)、『幸福実感社会への転進』(モロロジ一研究所)ほか。